

0. はじめに

早いもので羅臼町内の全学校（幼稚園も含む）がユネスコスクールに加盟して足掛け5年目を迎えることになる。

この間、2014年にESDの10年が終わり、全国の加盟校は1000校を超えた。ユネスコパリ本部の意向もあって、今後はユネスコスクールの数を増やすよりも質的向上に重点が置かれ、活動の質が問われるようになると聞く。羅臼のESD・ユネスコスクール活動もそれぞれの学校ごとの活動の質を高める方途を探る必要に迫られる。

それに伴い、これまでの活動に対する深いな検証が必要となる。本稿を通して、その概略をまとめてみた。

1. 幼稚園での活動

この三年間の大きな出来事の一つは「知床学」の副読本が完成したことだ。三分冊からなり、幼稚園と小学校低学年向け、小学校3～6年生向け、中高校生向けの三分冊から構成されている。幼小低向けは、ページ数を抑え、持ち歩きやすくすると共に屋外での活用も考えて耐水紙を使った。2つある幼稚園では、ともに園庭の植物観察や磯の生物観察などに活用している。2016年6月、春松幼稚園では、ESD日米教員交流事業で羅臼町を訪れた米国の教員と幼稚園児が、これを使って園の前浜でともに磯の生物観察をする光景が見られた。

2. 小学校の活動

羅臼町ではユネスコスクール加盟承認に先立って町内の小中高校生が一堂に会する「ユネスコスクール研究発表会」を開催して学校間の交流を図ってきた。この発表会は2016年度で第六回になったが、ここで各学校におけるESDの取り組みがよく反映されている。

たとえば、2015年の同発表会では、春松小学校4年生によって「羅臼のみりよく」というタイトルの発表が行われた。それは、羅臼の自然、景勝地や産品を紹介するもので、最後に子どもたち自身が作詞し、地域の大人がメロディーを付けた歌を合唱して紹介した。

それまでは、「調べ→まとめ→発表する」という形式から出ることがなかったのだが、「歌詞を考える→曲にする→歌で表現する」という芸術的な活動への広がりを得た。特に小学生の段階では、合唱や劇などの表現活動を通して郷土への興味を高め、愛着を深めることになるかと聞いている。これは、羅臼のESDにとって画期的な出来事だったと考える。

ちなみに今年度の発表会では、この続編として同小の4年生が「羅臼のみりよくを伝える人々」と題して、観光ガイド会社や鯨観察船、一次産品加工の起業をした人などを紹介する学習の成果を発表していた。

3. 中学校の活動

中学校の活動は、中高一貫教育の時期から継続されているクマ学習と生態系学習が続いている。

また、羅臼中学校で以前から続いている観光パンフレット作りと羅臼町を紹介する取り組みは非常に特色ある郷土学習である。ユネスコスクール加盟に伴って、このパンフレットに自然資源の持続可能な利用を図るための示唆が多く含まれるようになり質的向上が見

られる。

ユネスコスクール研究発表会での中学校の発表は開始時から一貫して職場体験学習の報告である。しかし、プレゼンテーションの方法などに工夫が見られるようになり、変化と発展の兆しが示されている。

4. 高校の活動

羅臼町の中高一貫教育（現在は幼小中高一貫）は、羅臼高校への進学者を確保し、町の高校の存続を目指して行われてきたものであるが、残念ながら相変わらず中学校卒業者の40パーセント近くが町外の高校に進学していて、その効果が発揮されているとは言い難い現実に直面している。

この悪条件と闘いながらも羅臼高校は、校内にESD委員会を設置するなど、全校を挙げてESDに取り組み大きな成果をあげている。

たとえば北海道高校生チャレンジグルメコンテストにおける続く三回にわたるグランプリの受賞である。郷土で獲れる素材を活用した創作料理は、出場初回から2回連続して受賞し、一昨年度は逸したものの本年度、見事に返り咲いた。

2015年度には札幌市のコンベンションセンターで開催されたIWMCV（第5回国際野生動物保護管理学会）の高校生シンポジウムに知床のヒグマの生息状況と人との共存をテーマに3名の生徒が英語でプレゼンテーションを行い高い評価を得た。

また、本年度6月には米国教員の訪問を受けて、英語による知床の紹介を行った。また、冬に海外から羅臼を訪れる観光客に英語でガイドを行うなど活動の幅を着実に広げている。

このような高校の努力が広く町民や中学生に理解され、羅臼高校への進学率上昇することを熱望せずにはいられない。

5. 課題と展望

ユネスコスクールに加盟して以来、羅臼町のESDは着実に進展していると言えるだろうが、少なからぬ課題も残しているというのも偽らざる事実であろう。

もっとも大きな課題は、現場の教職員一人一人がESDを推進する自信を持ってないという事かも知れない。

現場の教師は日々の学習指導や生徒指導、校務分掌などの業務に追われ、多忙感に苛まれている。そのような状況でESDについて深く理解する余裕が与えられないまま現場に立たされている。そうするとESDと言っても日常の仕事に新たなものがもう一つ加わってますます多忙化するのではないかという誤解を払拭しきれなくなる。

これが悪循環となり、ますますESDに背を向けるようになるとも考えられる。この傾向は特に中学校で著しく、町外の高校への入学者選抜のための応試教育に没頭したり部活動の指導に時間をかけるなどして、総合的な人間形成を目指すESDを真正面から考えようとしない傾向もまだ多く残っているような気がする。

今後は、より効果的で適時適切な研修機会の設定などによって、これらの課題を克服していくよう努めたいと考えている。